



境内林の現況

本多静六通信

第27号

発行
本多静六博士会
を顕彰する

林学博士本多静六と和樂備神社

一、和樂備神社の境内整備と本多博士

日本の「公園の父」と称される林学博士本多静六(以下本多博士)が全国各地の公園の設計や明治神宮の森の造成に携わったことはあまりにも有名です。

和樂備神社権禰宜 堀江 清隆

しかし残念なことに村の小学校の設計に関わったり「村の鎮守」の境内整備を手掛けたりした事はほとんど世に知られていません。

和樂備神社(以下当社)の境内は本多博士が設計したと伝えられて来ました。博士が村のお宮の境内の設計を行うなんて一般にはあり得ないことだといわれます。「何か根拠になるものがあるのですか」と尋ねる人があると決まって「伝本多図面」と住吉屋総本家岡田家通称大住(以下大住)との関係をお話するのが常でした。最近「和樂備神社合祀百周年記念誌」編集にあたり当社所蔵文書の整理を行っていたところ岡田健次郎町長(以下町長)の境内整備に関する覚書きが見つかりました。町長個人と博

士との予てからの関係(詳細は後段高松稿を参照)を考慮し確信を得るに至ったのです。

■和樂備神社の由緒

鎮座地 蕨市中央四丁目二十の九
当社は明治四十四年(一九一三)蕨町の村社八幡社に無格社十八社を合併して社名社号を「和樂備神社」と改称しました。「わらびじんじゃ」と読む万葉仮名風の社名は町長の草案をもとに東宮侍講文学博士本居豊穎が命名しました。

村社八幡社の創建は明らかではありませんが、社伝によれば室町時代に蕨を所領とした足利將軍家の一族、洪川氏が蕨城を築き、その守り神として八幡大神を奉斎したのがはじまりとされています。

現在、隣接する城址公園が埼玉県旧跡に指定され当社の神池は蕨城の水濠の名残を留めています。ところで、「洪川直頼讓状写」(賀上家文書)に、観応三年(一二三二)二) 洪川直頼から嫡子金王丸に譲られた所領のうちに「武蔵国蕨郷上下」が記載されている事や「鎌倉大草紙」には、長祿元年(一四五七) 洪川義鏡は、曾祖父義行が蕨を居城としていた関係で、室町幕府から関東下向を命じられたと

ある事などから蕨と洪川氏のつながりを示しています。さらに、御神像「僧形八幡立像」(蕨市指定文化財第十二号)には、天正十一年(一五八三)の墨書銘があり、八幡社の創建の年代をうかがい知ることが出来ます。

江戸時代には「上の宮」と呼ばれ「中の宮」(氷川社)、「下の宮」(氷川社)と共に蕨宿鎮守三社として重きをなし三学院末成就院が別当として祭祀を掌りました。明治六年(一八七三)村社に列します。

明治四十四年神社合併の後、町長は蕨の街にふさわしい神社にすべく積極的に境内整備を進めました。先の大戦後は国の管理を離れ宗教法人となりました。

平成九年県道拡幅工事のため境内地の一部を提供し、境内林が減少しましたが市域に残された数少ない緑地として氏子崇敬者はじめ市民の拠り所となっています。

■岡田町長と境内整備

合併によって和樂備神社が旧八幡社より継承した社有地は境内地五畝十三歩(百六十二坪)と境内林(編入許可上地林)二筆の二畝二十九歩(八十九坪)並びに四畝六歩(百二十六坪)を加えた合計

一反二畝十八歩（三百七十八坪）ほどのわずかな敷地でした。

当初の境内整備は「合祀并社号改称願」（当社文書）の添付図面にあるように間口十六間奥行二十二間を計る旧八幡社から引き継いだ敷地内で行われる予定でした。

早速、町長は合併によって消滅した旧神社の事務手続きに着手しました。また神社の運営資金を確保するため大正元年には旧神社跡地の立木の競売を進めました。大正二年には神社跡地に残された建物や石造物の移転や解体引き取り等が行われ本社の大改築を行いました。実はこの造営計画は本殿とその覆屋は敷地内に収まらない規模となっていました。合併後は神社の経営を氏子らの寄付金だけでは賄うことができず、先に示した立木の売却を行いました。日露戦役後の経済停滞により思うに任せず篤志家からの借入によって運営しているような状態でした。そこで町長は境内に隣接する周辺の土地を自ら取得し工事を進めました。大正六年（一九一七）には停車場道（蕨駅西口前通り）と境内を一直線に結ぶ新道を開削し町民の流れを神社に向けました。

大正十二年四月に至って神社経

営がようやく軌道に乗ったため町長の個人名義となっていた土地を神社が改めて買い受け、町有地並びに道路敷を社有地と交換し、境内地が実質千坪を超えることになりました。同年六月埼玉県知事に「神社境内拡張許可願」（当社文書）を提出し現在のほぼ内玉垣内にあたる千五十二坪が特別に境内地に編入されました。

大正二年四月内務省令六号第十二条に村社の境内は七百坪を超過してはならないという規定がありました。その後段に「但シ特別ノ縁故、土地ノ状況等ニ依リ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス」ともあり特に許可が下りたようです。

翌大正十三年、町長の念願であった「神饌幣帛料共進神社」の指定を受け、神社としての風致景観が整いました。最終的に町長は一の鳥居から内玉垣までの前庭（神園）を含めた広大な境内を計画していたようです。昭和十三年（一九三八）に東京丸ノ内会館で行われた「自治制発布五十周年記念座談会」において、その後何度も県に前庭の境内地編入を願したものの許可されなかったことが語られています。

■本多博士と境内整備

「伝本多図面」には第三者の筆書きによる注記があり「大正三年四月五日日本多静六博士来蕨設計ス」と具体的な日付が記されています。また「岡田健次郎町長境内整備覚」に「植樹ニ付テハ本多博士ニ指導ヲ受ケ」とあって博士が境内整備に関わった事実を示しています。

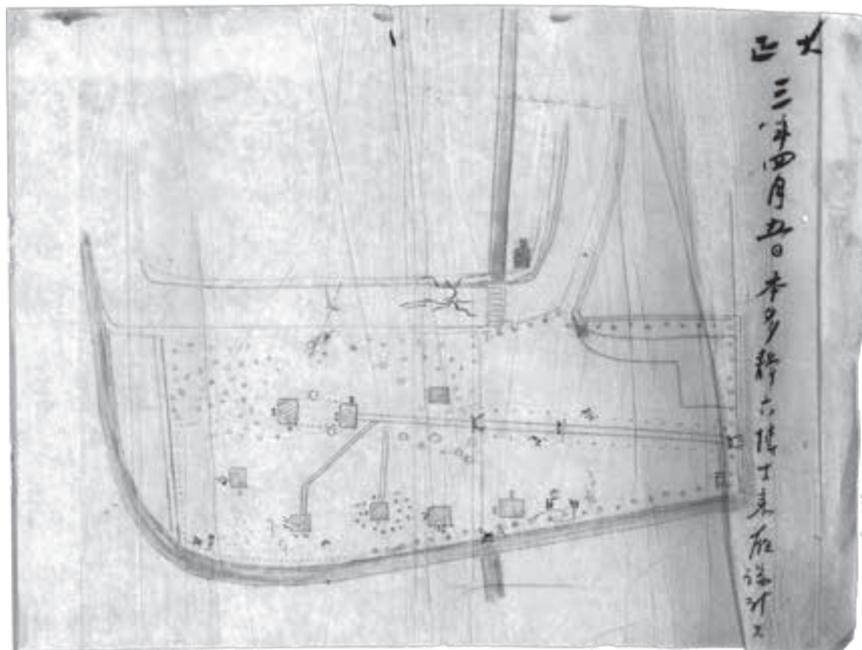
さらに昭和十年に埼玉県蕨町青年団が主催した「蕨町の歴史を語る座談会」において町長は本多家との関係を示し「本多静六さん辺りも私が頼めば簡単に町へも来て呉れるといふ筋合になってゐる」と語っています。

では一体本多博士から受けた指導とはどのようなものだったのか。残念ながら具体的記録が残されていないため明確にすることはできませんが「伝本多図面」が博士の書き残したものの又はその写しと仮定するならばおおむね次のようなことを示すことができます。

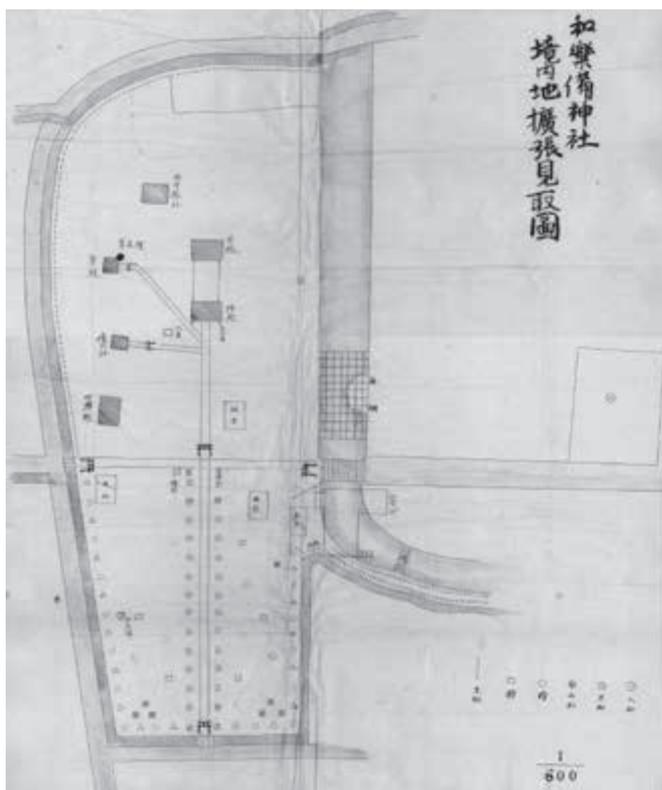


「岡田健次郎町長
境内整備覚（抄）」

図面は薄手の用紙に鉛筆で描かれ寸法は約二十三センチ×三十二センチくらいです。公道の部分は朱が塗られています。縮尺は明記されていませんが旧公図に重ねると六百分の一位と思われる。ただし旧公図と境内の形状が必ずしも一致するわけではありません。また建物は「□」の中に斜線を引いて表し樹木は「○」または「・」で示しています。建物の大きさや樹種等筆またはペンによる注記があります。参道に沿って幅三間で二間間隔に左右十五本ずつ合計三十本のクロマツの行路樹が「・」で記されています。この松は現在も数本残り往時の景色を伝えています。境内の北辺と南辺には公道に沿って「L」字型に堀割があり堀より六尺（鉛筆による注記）離れて「櫻○」と「桜+」が四間間隔で交互に記されています。現在の内玉垣内に目をやると本社本殿の裏と拝殿の左右両側に「○」で



「伝本多図面」



「和樂備神社境内地拡張見取図」

樹木が示されています。樹種は記載されていませんが大径木は大きめの「○」で示されています。また大正十二年付「神社境内拡張許可願」には二枚の添付図面がありました。「和樂備神社境内全図」は大正十二年六月二十三日に製図された縮尺三分の一の求積図で用紙の大きさは約七十七センチ×

五十七センチくらいです。「和樂備神社境内拡張見取図」は縮尺三分の一で用紙の大きさは約六十七センチ×五十二センチくらいです。建物と樹木の配置が記入され樹種が記号で示され「伝本多図面」に境内の形状が類似しますが現在の内玉垣の外である前庭にあたる部分を中心とした植樹の記載です。

これらの図面の植樹に関する記載は本多博士の「社寺風致林論」(明治四十五年)『大日本山

林会報』第三百五十六号に示された「其二社寺風致林の理想的林相」の内容と類似しています。(注一)とここで大正三年四月付「和樂備神社神園費受払帳」等の諸帳簿を見ると博士が蕨を訪問してから苗木代や人夫手間が極端に増加し、境内の植樹が本格化したことを示しています。但し帳簿上購入された苗木は「檜百本・真木百本・杉二百本・黒赤松四十本等」であり図面との相違が見られます。

に至るまで多年にわたり協議を重ね漸く合併に至った経緯と機業の発達により職工労働者が増し町の施設として公園の設備が必要なことを強く働きかけ村社としては異例の千五十二坪が境内地に編入されるに至ったのです。本多博士も前出「社寺風致林論」に「社寺風致林とは主として社寺の風致尊厳を増す」ことが本来の目的ではあるが「公衆の娯楽、遊散用即ち今日の所謂公園の用をなすもの極めて多し」と記し社寺風致林の公園利用を示しています。

■境内林の変化

本多博士が来訪の翌年にあたる大正四年の「御大典記念帖」や昭和三年の「御大典記念帖」に掲載される写真のほか当社に残る古写真を見ると一の鳥居から参道に沿って続く見事なクロマツの若木の行路樹が続きます。さらに進むと現在の内玉垣内左右には旧上地林



参道の行路樹 (昭和8年頃)

のスギ樹林やクロマツの大径木などが見られます。また現在内玉垣左にあるクスの大径木のあたりにケヤキの大径木があったことが確認できます。さらに現在も残る根回りに特徴のあるケヤキの大径木が確認できます。また大正十二年付「神社境内拡張許可願」には「旧八幡社の杉木」という記載も見られます。スギやマツの老樹に覆われた境内は年々枯損木も発生する為届出の上伐採し維持管理に努め昭和九年には皇太子殿下 御降誕を記念して「檜苗大小五百三十二本、杉苗外七十八本(注二)」の植樹が行われました。昭和十三年付「境内立木伐採願」(当社文書の添付図面を見ると現在の内玉垣

内の立木はスギ八十三本、マツ五本、ケヤキ五本、クリ一本合計九十四本が確認できます。添付図面に記載されたクロマツと思われる切り株が現在も残っています。内玉垣内のスギやクロマツの老木はいわゆる高度経済成長時代に次々と枯れ、当地に天生するシイ類、カシ類、クスなどの常緑樹に変わり県道に面して植樹されたサクラは枯損しケヤキも平成九年の県道拡張工事によって伐採されました。現在残る「伝本多図面」の植樹を示すと

- ① 行路樹のクロマツ五本と会館角に移植されたクロマツ一本
 - ② 神社館前のケヤキ
 - ③ 一の鳥居右脇のケヤキ
- くらいとなっていました。

■結びに変えて

以上本多博士と当社の関わりを報告しましたが、今後当社に残された文献資料や古写真を精査し、本多博士が神社合併後の境内整備に具体的にどこまで関与していたかを明らかにする必要があると思われまます。またこの報告を契機にこれまで知られていない各地の本多博士の業績が世に出ることを期待しています。

二、岡田町長と本多静六博士

蕨市歴史民族文化調査プロジェクト調査員 一級建築士 高松 敬

和樂備神社は明治四十四年(一九一)十二月の合併を経て、岡田健次郎町長(以下町長)を中心に境内等整備事業を進めることになりましたが、風致景観の整備、なかでも植樹については、林学博士本多静六(以下本多博士)に指導

を仰いでいます。博士との接触を考えると、埼玉県をゆかりとする造林学の大家であることが挙げられますが、当社においては、町長を輩出した住吉屋総本家岡田家通称大住(以下大住)の門五郎と本多博士の義父である本多家の敏三郎(後に晋と改めます。以下敏三郎)との彰義隊を通じた江戸時代の終わりまで遡る親交を礎としました。



全生庵に残る伴門五郎の墓表(筆者撮影)。碑文の末には、「舊友丸木利恒謹撰」に続いて「同本多晋左筆謹書」と刻まれています。

敏三郎(後に晋と改めます。以下敏三郎)との彰義隊を通じた江戸時代の終わりまで遡る親交を礎としました。門五郎は、天保十年(一八三九)年に大住七代目正広通称平左衛門の三男(注三)として蕨宿(現蕨市)に生を受け、伴家の養子に迎えられます(金子吉

衛『彰義隊の主唱者伴門五郎』
（一九六八）。

伴家の当主は経三郎でしたが、自身も大住六代目 和平治の三男で、伴家は二代にわたって大住の男子を跡取りとする家系でした。

門五郎は十四歳で伴家の家督を継ぎ、幕府に出仕し、御徒から陸軍調役にへと昇進します。安政五年（一八五八）生まれの町長は門五郎の兄で父の八代目 正直を七歳の時に亡くしたこともあって、叔父の門五郎を父親代わりに慕って多くのことを学びました（前掲『彰義隊の主唱者伴門五郎』一九六八）。

後に、門五郎の墓表を上野谷中の全生庵（注四）に建立するにあたって発行された冊子に町長は「祭叔父伴省齋君文」を記しますが、「（前略）幼ニシテ孤叔父ノ教育ニ依ル亦多シ（後略）」と當時を回想しています（丸毛利恒編『追遠集』一八八八）（注五）。



冊子『追遠集』表紙（国立国会図書館蔵）

その門五郎も町長が十歳の時、彰義隊士のひとりとして上野の山で戦に臨み、わずか三十歳という短い生涯を終えてしまったと伝わります。隊士の戦死者は二百余名を数えたそうですが、主だった幹部で戦死したとされるのは門五郎ひとりであったとのこと（前掲『彰義隊の主唱者伴門五郎』）。

父親代わりともいえる門五郎を失った時の想いを町長は同じく「祭叔父伴省齋君文」に「（前略）幼ニシテ父ヲ失ヒ又叔父ヲ失フ行ヲ匡シ疑ヲ質ス所ナシ（後略）」と記しています（前掲『追遠集』）。父、叔父という存在を立て続けに失った落胆の大きさが伝わってきます。町長はこの後、彰義隊のなかで門五郎と特に親しい間柄にあった敏三郎に指導を仰ぐことになりました。ことあるごとに町長は敏三郎の元を訪ね、数々の教示にあずかったそうです。敏三郎もしばしば大住に足を運んで町長の話を傾けたと伝わっています（前掲『彰義隊の主唱者伴門五郎』）。

町長にとって叔父代わりともいえる存在となった敏三郎には、才媛の誉高い自慢の一人娘の長女の銚子がいきました。その婿に迎えられたのが、埼玉県南埼玉郡河原井

村（現久喜市）出身で当時、東京農林学校の学生であった折原静六後の本多静六、本多博士その人でした（本多静六博士を顕彰する会編『本多静六通信 第二十四号』（二〇一六））。

町長と本多博士の親交は、敏三郎を通じてはじまったと考えられますが、町長の重職にあって役場職員を指揮し、当社の境内等整備を進めるなかで博士に意見を求めることは、敏三郎に教示をあくするのと同じく、大住の健次郎として自然なことであったことでしょう。

大正十年（一九二一）に敏三郎が亡くなってからは、町長と本多博士の親交に移ったと考えられますが、昭和十年（一九三五）に埼玉県北足立郡蕨町（現蕨市）の金亀山三学院で開催された座談会で「（前略）伴門五郎といふのが私の叔父で、之が彰義隊の発頭人であった。本多静六博士のお父様で本多新（晋の誤記と考えられます）という人が志士で（中略）そんな関係で本多静六さん辺りも私が頼めば簡単に町へも来て呉れるといふ筋合になってゐる（後略）」と町長が語るまでの間柄になっていました（前掲『本多静六通信 第

二十四号』（二〇一六）、埼玉県蕨町青年団団報部編「蕨町の歴史を語る座談会」蕨市立歴史民俗資料館紀要第八号（二〇一一））。

本多博士は町長にとって敏三郎に同じく、教示にあずかることのできる親交へ発展していった様子が伝わってきます。

町長と本多博士との関係は、明治四十四年十二月の合併に続き、大正から昭和にわたる当社の境内等整備の先導に立って後に続く道筋を確かなものとした町長と門五郎を輩出した大住と本多家の敏三郎の江戸時代の終わりまで遡る親交を礎に、これをひとつの形にしたのが、本多博士による植樹の指導でした。

町長は、現職のまま昭和十五年に八十三歳で生涯を閉じ、大住は長男の徳輔氏（注六）の時代へと移っていきます。同氏は明治十九年（一八八六）に蕨宿で生を受け、埼玉県立浦和中学校（現埼玉県立浦和高等学校）を卒業後、渋沢栄一、諸井恒平、本多博士らを中心に設立された埼玉学生誘掖会（注七）の一期生となります。この後、東京高等商業学校（現一橋大学）に進み、卒業後は東京毛織や紡績会社を経た後、秩父セメントとそ

の関連団体に籍を置きます。徳輔氏も父の町長に同じく、本多博士の系譜につらなる人物でした(蕨郷土史研究会編『岡田健次郎翁伝 付岡田徳輔 岡田義夫略伝』(一九八九)、洪沢栄一記念財団洪沢史料館編『学生寄宿舎の世界と洪沢栄一 埼玉学生誘掖会の誕生』(二〇一一)、秩父セメント編『諸井貫一追想文集』(一九六九))。

おわりに徳輔氏は晩年、殉難彰義隊士の百年法要に参列しますが、この際に発行された冊子には、徳川家、松平家、榊原家、酒井家、大河内家、山岡家、天野家とともに旧彰義隊の頭取代表として本多敏三郎家の本多博氏、旧彰義隊戦死者遺族伴門五郎家の代表として徳輔氏の名が記されていて、大住と本多家の彰義隊を通じた三代にわたる親交が百年を経た後も継承されていた様子をうかがい知ることが出来ます(彰義隊墓所主管所『第百年祭施行要領 上野彰義隊士百年祭趣意書』(一九六七))。



冊子『第百年祭施行要領 上野彰義隊士百年祭趣意書』表紙(蕨市立図書館蔵)

〔注一〕「社寺の後方及び両側の三面は四季を通じて神聖幽翠莊嚴にして所謂神々しき状態を保たたしむるを原則となす特に社寺の後方は奥深く森々として林内を見透かし得ざる如くなすを要す」また「社前の大通りの両側に各二條の行路樹を植ゑ之にはケヤキ、イチヨウを主とし(中略)又場合によりてはクロマツ、赤松を用ふるも可なり」などが記されています。

〔注二〕昭和九年付「皇太子殿下御降誕記念 植林費寄附方名簿」(当社文書)に記されています。

〔注三〕母は隣宿 浦和の小谷野家から嫁入りした勢無でした。同家は後に、浦和市長の小谷野伝蔵を輩出します。同氏の業績は、さいたま市の宝珠山玉蔵院 延命寺境内に建立された記念碑を参照のこと。同碑は蕨町(現蕨市)を拠点に制作活動を続けた彫刻家の長

谷秀雄が手掛けています。

〔注四〕庵主は山岡鉄舟(以下山岡氏)でした。同氏は生前、町長とも親交があり、町長が二十五・六歳の時分、明治十六年(一八八三)頃に山岡氏を訪ね、門五郎の生死について話を聞くなどしています(埼玉人物評論社編『埼玉人物評論』(一九三六))。なお山岡氏はこれより二年程前の明治十四年に芝村(現川口市芝)の大智山長徳寺を訪ねるにあたり、蕨宿に立ち寄っています(読売新社『読売新聞』明治十四年三月十六日、同三月十八日)。この際、宿のいづれに滞在したかについては、その旨を記した史料に欠くため、詳細は判然としません。

〔注五〕『追遠集』には、敏三郎のほか、山岡鉄舟、丸毛利恒、須永伝蔵、尾高淳忠がそれぞれ長歌、和歌、漢詩と和歌、漢詩と和歌、漢詩を寄せています。なお建立された墓表は、篆額が山岡氏、謹書を敏三郎、撰文を丸毛が手掛けています。

〔注六〕徳輔氏には実弟の義夫氏がいました。同氏は東京工業高等学校(現東京工業大学)、リーズ大学で紡織を学び、戦前、戦中、戦後を通じて毛織物業の発展に尽

力します。また翻訳を通じてサミュエル・ウルマン作の「青春」と題する詩を広めた人物のひとりでした(前掲『岡田健次郎翁伝 付岡田徳輔 岡田義夫略伝』)。

〔注七〕町長との関係がうかがわれる誘夜会の会員に山田醇(以下山田氏)がいました。同氏は埼玉県秩父郡金崎村(現秩父郡皆野町)出身の二期生で、東京帝国大学(現東京大学)に学び、卒業後は辰野葛西事務所勤めて、独立し、山田醇建築事務所を主宰します(内田青蔵『日本の近代住宅』(一九九八))。

山田氏は本多博士の著作にその名を見ることが出来るほか、博士の自宅や別荘、博士と親交のあった諸井恒平が経営した秩父セメント関連施設の設計を手掛けた可能性もあるなど博士の系譜につらなる人物でした。同氏については神奈川大学 内田青蔵研究室を中心に調査が行われており、調査には筆者も参加の機会を得ているところで、今後、関係機関に資料の閲覧など協力を仰ぎたいと考えております。

第十一回本多静六賞 受賞者のご紹介

主査 山崎 宏剛

一 第十一回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を平成十九年度から表彰しています。第十一回本多静六賞については、計十六件（個人七、団体九）の応募があり、「特定非営利活動法人 ときがわ山里文化研究所」（以下、「ときがわ山里文化研究所」）が受賞されましたので御紹介します。



ときがわ山里文化研究所と
大東文化大学の皆さん

二 「ときがわ山里文化研究所」 の沿革と功績

○沿革

ときがわ山里文化研究所は、幅広い都市住民と地域住民の交流活動で山間地域の自然環境を守り、文化を継承する目的で、平成十六年五月に設立されました。

「間伐材でログハウスを作ろう」事業を振り出しに、以来十年以上、毎年六十から七十の多彩な事業を実施しており、延べ三千名の参加があります。

現在の会員数は約三百名で、うち八割が町外在住者となっています。

○功績

(一) 荒廃した水源林の再生に貢献
都幾川源流域の荒廃したスギ・ヒノキ林、約2ヘクタールを整備して広葉樹（クヌギ、ナラ、トチ、ヤマザクラ、エゴ、ケヤキ、ヤマモミジ等）を植栽し、豊かな水源の森を造る活動を行っています。

この活動は大東文化大学との協働事業として実施され、多くの学生とともに会員が汗を流し、子供からお年寄りまで誰もが森に親しみ、森を体験できる、楽しい森を目指しています。

(二) 地域の活性化に貢献

荒廃した里山や竹林を整備し、地域の環境を保全する活動において、発生した竹材を竹炭の材料として活用したり、放置され荒れていたワサビ田を再生し、採れたワサビをワサビ漬けに加工し、町の特産品として販売するなど、山の恵みを活用して地域の活性化を図る活動を行っています。

(三) 山里の食や文化の伝承

山里の食づくり講習会を開催し、食文化を広く発信したり、過疎化により衰退の危機にあった地域のお祭りに参加するなど、山里の伝統文化を継承する支援活動を行っています。

(四) 山村と都市の交流

春の「山菜を食べる」、夏の「源流探索」、秋の「収穫祭」など、年間を通して地域との交流事業を



竹林整備の様子

開催するとともに、夏には「ときがわ山の学校」を開校し、例年五百名以上の都会の子供たちに自然に触れる機会を提供しています。

三 本多静六賞表彰式

表彰式は、四月二十日に知事公館で行い、上田知事から、ときがわ山里文化研究所の柴崎理事長らに表彰状と賞金、記念品が贈られました。



表彰式の様子

四 終わりに

県ではこれからも賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいきます。

引き続き皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

本多静六博士

記念の森の歩み

本多静六博士を顕彰する会

高橋 兼一

はじめに

私は、本多博士を顕彰する会に平成二十五年に入会し、入会と同時に博士を記念して作られた森の管理を担当して、今年で六年目になる高橋と申します。

今回、顕彰する会の柴崎会長より森の歩みについての執筆依頼がありました。何分にも経験と知識不足で、詳細については分かり兼ねる点が多々あるかと思いますが、私の知る限りの知識で纏めてみました。

一 森づくりの設立由来

埼玉県では、「彩の国緑の基金」を利用して森づくりを進める事業を進めておりました。その事業の一環として、菖蒲町三箇地区内（現久喜市）に「本多静六博士の森づくり」事業が実施されることになったのです。

これは当町出身で日本初の林学博士となり、林学の基礎を作ると

同時に、日本初の大学演習林設立や青森県野辺地の鉄道防雪林の設置等を行った、本多静六博士の偉業を記念して作られるようになったのです。

このことから、この森は、特に本多博士が力説されております、



植栽二年目の生育



植栽三年目の生育

「自然の力を活かした森づくり」の考えを取り入れて記念の森は作られることになりました。

その他にも博士の実績としては、国内の主要な有名公園である「日比谷公園」、「明治神宮」、「大宮公園」、「須坂市の「臥竜公園」及び福岡市の「大濠公園」を始め、大小合わせると数百の公園設計をしたと言われています。

また、秩父の山林を県に寄付し、その木を伐採し利益を得た金で奨学金制度を設立するなど、数々の大きな社会的貢献を成し遂げていることなども、森づくりの評価に繋がったものと思われまます。

二 森・設立の経過

本多静六博士の森づくりは平成二十一年四月一日に埼玉県、菖蒲町及び本多博士を顕彰する会（以後、顕彰する会）の三者による協定書が正式に交わされてスタートし、協定は平成三十年三月三十一日まで継続されることになりました。

その直前、平成二十一年二月二十三日植栽地に隣接する菖蒲南部産業団地の一角で、埼玉県、菖蒲町、三箇小学校及び顕彰する会の

関係者によるオープニングセレモニーが開催され、終了後に三箇の森公園脇の植栽予定地に移り、植栽が行われました。

協定はその後、平成三十年の四月一日にも継続され、平成三十五年三月三十一日迄の期間延長がされました。

三 植栽の具体的内容

植栽は県の寄居林業事務所の技師による指導で、三箇小学校の一（二年生、三（四年生、五（六年生別に分かれ、総勢二百三十名の児童が中心になって行われました。植栽樹種は左記のように郷土の代表的な樹種を中心に行われました。



三箇小学校の児童達

主な植栽樹種

・コナラ、クヌギ

ポット鉢植え 二百八十本

・エゴノキ、ガマズミ、ミズキ

エノキ(約1m) 百六十本

・シラカシ、スダジイ(約1m)

四十本

・クスノキ(約4m) 十一本

合計、四百九十一本の苗木を、

概ねヘクター当たり二千四百本
換算で植栽され、苗木と苗木の間
隔は、ほぼ二m間隔に植え付けさ
れました。

なお、中心的樹種のコナラやク
ヌギは、三箇小学校の児童がポツ
トに種を播き丹精に育てたもので
す。

四 その後の管理

植栽地は、埋め立てにより造成
された土地で、土壌は砂礫等が混
じった樹の生育にはやや劣悪な状
態であったため、柴崎会長を始め
顕彰する会のメンバーが、支柱を
立てたり、夏期には乾燥防止のた
めにこまめに灌水を行ったり、そ
して下草刈りなどを行い幼木の生
育を見守った。

その後、関係者による緻密な管
理が行われたため、それぞれの樹



乗用草刈機

は順調に育っていましたが、そ
の後の管理の重点は、下草の雑草
防除でした。最初の頃は顕彰する
会のメンバー七〜八名で鎌や草刈
り機で対応しておりましたが、メ
ンバーの高齢化で作業が厳しくなっ
てきたところに、他の公的機関か
ら使用しなくなった乗用の草刈機
を譲り受けることができ、非常に
下草刈りの能率を上げることがで
きました。

五 間伐について

植栽して八年が経過しました。
樹は約五〜六mの高さに生長し、
幹も太り森の枝密度が高まり、下
の方の枝の切り落としだけでは管
理だけでは限界となってきました。

そこで、樹の管理に詳しい専門家
に相談したところ、植栽時の約半
分(約二百四十株位)の数に間伐
して、樹幹間隔を四〜五m位に空
けて、太陽光線の当たりをよくす
ると同時に、風通しもよくする必
要があるとの指導を受けました。



間伐作業



間伐材のチップ切り作業



間伐後の森の中

そこで複数の造園業者から見積も
りを取り、その結果、間伐材もチッ
プにして散布可能な業者があり、
環境によく、腐植堆肥の施用もで
き、樹の生育に寄与できることか
ら、その業者を選定し、平成二十
九年三月に間伐を実施しました。
その結果、樹の間隔が確保され
のびのびとした生育が得られるよ
うになりました。

六 現在の記念の森

と今後について

幼木を植栽し、本年度十年が経
ちましたが、順調にすくすくと生
長し、高さは10mを超えた樹も見
られるようになり、漸く森として
の体裁が見られるようになってき



植栽十年後の冬の生育



植栽十年後の夏の生育

ました。そうして、鳥達も多く見られるようになり、スズメやメジロ等の小鳥類、ムクドリ、ヒヨドリ及びキジバト等が巣を作り、大型のキジ等も時々見られるようになってきました。

その他に、道路に面した森との

余白部分（約四m）に、顕彰する会の会員から西洋スイセン五百球が寄付され、植えられています。春先には見事に咲き誇り、公園を訪れる人達を楽しませています。

今後は、顕彰する会全員で、本多静六博士の森を、博士が推奨している、人が新しく木を植えたり、種をまいたりしなくとも自然の力だけで生長し続ける、「天然更新百年の森づくり」の精神を心がけ、管理を行っていききたいと思っております。

ゆかりの地訪問 日本最初の洋式公園を訪ねて

本多静六博士を顕彰する会

柴崎 一

恒例の市と共催による「ゆかりの地訪問」は、去る十一月八日に総勢三十一名が公園に到着したのは午前九時三十分頃でした。緑と水の市民カレッジの山口事務局長さんの案内で会議室にて本多静六博士による日本最初の洋式公園の概要について説明をいただき、その予備知識をもって公園内で実際に案内説明をしていただく児玉日比谷公園サービスセンター長さん



日比谷公園（雲形池と鶴の噴水）

と合流しました。児玉センター長さんは、明治三十六年に開園した施設や樹木に大変に造り深い懇切丁寧な案内をしていただき、大変に参考になりました。

公園の敷地面積は四万九千坪でこれを四区画に分けて設計施行したといわれ、公園の中には日本庭園に類する部分などもあり、大変にバラエティに富んでおり、樹木はクスの大木が多く見られ大変に印象に残りました。説明によると予算の関係もあつてか造園当時は五〜六十センチの苗木に過ぎなかつたといわれています。

散歩道の端には、外国から寄贈されたといわれる石物が置かれ多

くの見物者が熱心に見入っていたのが印象に残りました。

参加者が毎年集合写真を写す有名な「首かけイチョウ」については、明治三十四年にはすでに樹齡三百年といわれています。この大イチョウは道路の拡幅のため伐採の運命にあり専門の植木職人さえも移植は無理と言われていたのを、本多静六博士は「私たちには、移植を可能にするだけの学問の力がある。私の首をかけても・・・」と云って移植に成功したことで、世に云う「首かけイチョウ」と云う由来について話された。

日比谷公園の開園とともに「首かけイチョウ」の隣に開業したレストラン松本楼は、年に一回十円カレーの日を設けて今も発展を続けていますが、ウィークデイでも昼食時には行列ができるほどの利用者で私たちの日程では食事をとるのはとても無理と云われ残念ながらあきらめる事とし、コンビニの弁当で済ませましたが、参加者の中には頑張つて食事に恵まれた人もいたそうです。

今回の訪問は、本多静六博士の偉業を知るうえで大変に貴重な一日となりました。

明治神宮を訪れて

久喜市

岩名 巖

晴天の中、十一月八日「本多静六博士ゆかりの地訪問」をテーマとして研修に参加させていただきました。

車中では、市報に連載された「本多静六博士没六十年記念」の記事を指名された方々から順次朗読される中、バスは第一目的地である日比谷公園を見学し、次の目的地である明治神宮へと向って進み、神宮駅前を通過し車中にて説明のあった、菖蒲の青年団による大八車で運ばれた大クスノ木が大



明治神宮を見学する参加者のようす

鳥居のそばの右側に、そして左側には博士の縁者による献木のクスノ木が植樹されていました。

神宮の杜は、元井伊家の下屋敷で敷地面積は六十八ヘクタールもあつたそうです。そこに本多博士が森林の移り変わりを想定して植栽計画を行ったそうです。

大正五年から植栽作業を開始し、全国から十五万本におよぶ献木、十一万人の青年団による奉仕活動により今日の形が作られたそうです。

神宮の杜を見学して、枯れた木や、倒木がいたる所に散見され、たくさんさんの落葉が道路から山側に寄せ集められていました。神宮の杜では、年間七トンの落葉や小枝の実が土に帰っているとの事でした。

林苑主林木の条件として、気候風土に適し周囲から襲来する危害に耐え、長く健全に生育しうるもの。なるべく人の手による植栽や伐採は行わず。永遠に林相を維持できるもの（天然更新ができるもの）、林相は森厳で、神社林としてふさわしいものとの考で森造りした苦悩がいたる所で見られました。今回、神宮の杜を見学させてい

ただきましたが、外苑へは何回かおじゃまいたしました。明治神宮は初めての参拝でした。

日々平々凡々と過していた自分が、本日は充実した一日でした。この企画を菖蒲町時代より十六年も実施されておられます、「本多静六博士を顕彰する会」の方々に感謝を申し上げます。

伊香保温泉石段街を見学して

本多静六博士を顕彰する会
蓮 實 誠 一

平成三十年度の研修は「伊香保温泉石段街」見学を十月十九日に役員十名で行いました。

配付資料（本多静六記念館内データベースから）で車内研修、揭示文は次の通りです。

【伊香保温泉地の新経営案】

関わった期間は、大正八年

解説 群馬県渋川市伊香保町にある温泉です。傾斜地に作られた石段の両側に、温泉旅館、土産物屋、遊技場（射的、弓道）、飲食店などが軒を連ねています。三百六十五段の石段は温泉街の

シンボルであり、この界限は石段街と呼ばれています。明治以降は竹久夢二、徳富蘆花、夏目漱石、萩原朔太郎、野口雨情等多くの文人が訪れています。

本多静六がこの地を訪れ「伊香保温泉地の新経営案」を発表したのは、大正八年頃のことでした。背景には明治四十四年（一九一〇）に、渋川から伊香保温泉まで路面電車が開通し、観光客の増加が見込まれていたことがあります。当時の本多は、温泉地の経営に強い関心と独自の理論を持っていたことから、各地の温泉地から講演依頼があつたようです。

バス内で内容を学習し、伊香保町脇道路の上駐車場へ十時に到着しました。伊香保観光協会ガイド入澤さん（元銀行員）の自己紹介で、入社時に本多静六博士の四分の一貯蓄法の講話があり、そのときから博士に興味を持ち続けていましたと挨拶。前方の史跡「伊香保温泉発祥の地」千明元屋敷跡を眺めながら説明をし、案内は紅葉の名所、朱塗りの河鹿橋から出発しました。

史跡名所の説明を受けながら上

り坂を伊香保温泉露天風呂に向う道沿いにある飲泉所へ「黄金の湯」を試飲、温泉湧出口観覧所の温泉を噴出する様子がドーム状のガラス越しに眺められ、吹き出したばかりの湯は酸化していないため無色透明でした。続いて、千百年以上の歴史を誇る伊香保神社へ行き参拝。四百年の歴史をもつ石段街の説明を受けながら下り途中右折民家の奥に戦国時代からの石段が保存されており貴重な史跡でした。石段の途中にある温泉が流れる樋は、石段街の各宿に引き湯する際に用いる湯口で、「小間口」といわれ観覧所は五か所ありますと説明され、中を源泉が勢よく流れるのを見ることができました。



石段街与謝野晶子の詩背景 記念写真

十二支のプレートがあららに埋め込まれているのは、江戸時代に温泉の権利を持っていた十二軒の大家の屋敷跡を示すプレートで、干支は家紋のように使われたといわれ、貴重な歴史を知りました。

与謝野晶子の詩【伊香保の街】が石段中腹側面に刻まれていました。背景にして記念撮影。風情ある伊香保の情緒を楽しみました。

本多静六博士の関わりについて入澤さんから、博士が訪れた当時は石段街はできており、かなりの賑わいがあったと思われ、新経営案は近郊の森林保全策ではないかと話されました。

本多静六博士【伊香保温泉地の新経営案】の発表内容は確認できませんでしたが、伊香保温泉の歴史を学び知る事が出来ました。

帰途、水澤観音・湖畔の宿記念公園・榛名神社を訪ねました。

水澤観音・坂東三十三観音霊場の第十六番札所。天台宗の古刹だが、古来より水澤観音の呼称で親しまれており、本尊は一切の衆生を救済してくれるという十一面千手観音菩薩。鐘楼、六角堂を見ながら水澤寺本堂へ。参拝。平成十三

年七月に建立された「釈迦堂」堂内を拝観いたしました。水澤寺に遺る数多くの貴重な仏像が安置されておりました。

榛名神社・榛名山の神を祀る神社で千四百年以上の歴史をもつ随神門をくぐり長い参道を上がって行くと、荘厳な建物や七福神が次々と現れ、武田信玄が先勝祈願の矢を立てたという樹齢千年の「矢立杉」を見て、竜の彫刻や水墨画が描かれている双龍門をくぐり社殿へ。参拝。背後のご神体を祀る巨大な「御姿岩」を拝見しました。

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさらに充実させるため、一緒に活動していただく会員の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

- 入会受付…随時
- 年会費…個人会員1,000円
 団体会員5,000円
- 問合せ…本多静六博士を顕彰する会窓口

編集後記

本多博士が大正二年に編さんした大日本老樹番付表。その横綱となつている巨樹を見ることができました。鹿児島県始良市の蒲生(かもう)の大楠です。樹齢約千五百年、樹高は三十m、根回りは三三・五七m、目通り幹回りは二四・二二mです。樹幹の下部には凹凸が多く、内部には直径四・五m(約八畳敷)の空洞があり下部には扉まで取り付けてあります。(入れませんが)横張は四方に広がり、まるで怪鳥が空から降り立ったようです。

下から見上げる壮大さと、地にどっしりと根をはった力強さは神秘的で不思議な感覚を抱かせてくれます。

大正十一年三月八日に国の天然記念物、昭和二十七年三月二十九日には国の特別天然記念物の指定をそれぞれ受けています。

機会がありましたら、是非見に出かけていただきたいと思います。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会
(窓口)

久喜市役所企画政策課
〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-13
電話 0480-122-1111(代)
久喜市萱浦総合支所総務管理課
電話 0480-085-1111(代)